**〔解　説〕**

　寛延二年（一七四九）大坂竹本座初演。並木千柳、三好松洛による五段続きの時代物です。平治の乱以後、再興を期す源氏の武将らを中心に人々の思いが複雑に絡み合って描かれています。源義朝の弟義賢の最期を描いた二段目「義賢館」、平家方なれども源氏再興を密かに願う者達を描いた三段目「九郎助住家」がよく知られています。

**〔あらすじ〕**

平治の乱で源氏を破った平清盛は、源氏の再興を恐れて一族の男子を根絶やしにせんと躍起になります。

木曽義賢から源氏の白旗を預かった小万（こまん）は、平家の兵に追われて琵琶湖に飛び込みます。溺れかかったところを、平宗盛の船に助け上げられますが、源氏方の女と露見して白旗を奪われそうになります。船に乗り合わせた斎籐実盛(さいとうさねもり)が旗を持つ小万の腕を切り落とし、白旗は小万の腕もろとも流れて行きます。

義賢の妻葵御前が身重であったことから、葵御前を匿う九郎助のもとにまで詮議が及びます。平家家臣の斎籐実盛と瀬尾十郎(せのおじゅうろう)が、葵御前から生まれた子と見せられたのは、女の腕でした（実は九郎助の娘で、源氏方多田蔵人の妻である小万の腕）。もはや逃れられない状況でしたが、実盛が唐の国の故事を引き合いに出してその場をしのぐことができました。

**〈実盛物語の段〉**

葵御前が生んだという腕が、九郎助夫婦の娘・小万の腕であると知った実盛は、小万の腕を切り落とした際のいきさつを物語ります。そうするうちに葵御前は後の木曽義仲となる男子を産みます。そして陰で成り行きを窺っていた瀬尾十郎が再び姿を現すのですが、小万の遺児太郎吉に討たれます。瀬尾は小万の実の父であり、孫に手柄を立てさせ、生まれたばかりの若君の家来をなれるようわざと手にかかったことを告げて息絶えるのでした。

(一般社団法人　義太夫協会発行)

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

実盛物語の段

泣き出す心根を、思ひやって実盛。

「さてはその方達が娘よな。聞きもおよばん宗盛公、竹生島詣で下向の御船、勢田、唐崎の方へ漕ぎ出すところに、矢橋の方より二十あまりの女、口に白絹を引っくはへ、ぬき手を切ってさっ〳〵と、浮いつ沈みつ游ぎくる。『アレ助けよ、アレ殺すな』と、舷叩いてあせれども、折柄比叡の山颪柴舟の助けもなく、水に溺れる不憫さに、三間櫂を投込んで、念なう御船へ助け乗せ、『コリャいかなるものぞ』と尋ぬるうち、追手と見えて声々に『その女こそ源氏方、白旗隠し持ったるぞ。奪ひ取れ〳〵』と呼ばはる声を聞きしより、船に居合はす飛弾ノ左衛門飛びかゝって『もぎ取らん』、『イヤ渡さじ』と女の一念。『もしや白旗平家へ渡らば、末代まで源氏は埋れ木。女が命にかえられず』と、白旗持たる肘をば、海へざんぶと切り落し、水底へ沈みしと、船を汀へ漕ぎ戻し、骸は陸へ上げ置きしが、り廻ってこのうちへ白旗もろとも帰りしは、親を慕ひ、子を慕ひ、流れ寄ったか不便や」

と涙交りの物語。

「三人かゝって放さぬ白旗、心よう放したは、わが子に手柄させたさか。死んでもそれほど可愛いか。手にとゞまった一念がものいふことはならぬか」

と御台もろとも取りすがり、泣くよりほかのことぞなき。実盛始終手をこまねき、人々の愁歎に涙と浮かむ一工夫、思ひついて傍に立寄り、

「かく甲斐々々しき女、たとへ片腕切ったりとて即座に息も絶えまじきが、白旗を渡さじと一心腕に凝りかたまり、五臓に残る魂なし。再び肘を接合はさば、霊魂帰り息することもあらん。誠にかの眉間尺が首、三日三夜にられても凝ったる一念恨みを報ぜし例しもあり。今この肘に温りあるも不思議、または御旗の威徳も」

と切ったる肘に白旗持たせ、

「ものは試し」

と接合せば、わが子を慕ふ魂魄も御旗の徳にや立帰り、息吹返し目を開き、

「太郎吉どこにぞ。太郎吉」

といふに、びっくり、

「ヤレ蘇生ったわこゝにゐる。こゝに」

「こゝに」

と取縋る。

「ナウ御台様。白旗はお手に入ったか。太郎吉にたった一言いひたいことが」

とばかりにて今ぞはかなくなりにけり。

「ヤアコリャ小まんよ」

「コレ〳〵〳〵小まんナウ」

「小まんやい〳〵。ハア可愛や〳〵〳〵〳〵な。生返ったがなほ思ひ、あんまりこれは胴慾な、ほいない別れ」

と取付いて『わっ』とばかりに泣きゐたり。ともに悲しむ葵御前。たゞならぬ身にせきのぼす、五臓の苦しみ御産の悩み、実盛驚き、

「ヤアコリャ夫婦の者。泣いているところでなし。御台は産の悩みあり、いたはりもうせ」

と一間へ伴ふ間もなく、用意の屏風引廻し、お腰抱くやらはやめやら、が介抱に、心利いたる実盛がかの白旗を押立つれば、実にも源氏を守りの印。若君安々御誕生初声高く上げ給ふ。父義賢の稚名をすぐに用いて駒王丸、後に木曽ノ義仲と名乗り給ひし大将は、この若君のことなりし。いつの間にかは瀬尾ノ十郎、小柴垣より顕れ出で、

「ヤアそりゃならぬ〳〵。かくあらんと思ひしゆゑ、死骸を持たせて窺ひ聞く。義賢が倅男子とあれば見遁しならず。いで受取らん」

と駈入れば、実盛やがて立ちふさがり、

「アヽこれ〳〵瀬尾。貴殿も生通しにもせまい。海とも山とも知れぬ水子、見逃しやるが武士の情」

「ヤアいふな実盛。さては汝二心な。じたいこのくたばった女めが、白旗奪ひ取ったるゆゑ、平家方は夜が寝られず。思へば思へば重罪人め」

と死骸を立蹴にはったと蹴飛ばし、

「サア生れたがきめ渡せ〳〵。異議におよぶとなで切り」

と飛んでかゝるを太郎吉が、母の譲りの九寸五分抜くよりはやく瀬尾が脇腹ぐっと突いたる小腕の力。『これは』と人々驚くうち、しばらくあって瀬尾ノ十郎。

「なんと葵御前。これで太郎吉は駒王殿の御家来にサならふがの。初めての御家来に平家の縁と嫌はれては、娘が未来の迷ひといひ、一生埋れる土百姓。七つの年から奉公せば、木曽の御内に一といふて二のなき家来。取りなし頼む〳〵実盛殿。サア瀬尾が首とって、初奉公の手柄にせよ」

と非道に根強き侍も、孫に心も乱れ焼き。すらりと抜いてわが首へ、しっかと当てゝ両手をかけ、

「えい〳〵〳〵」

と引落す。難波瀬尾と平家でも悪に名高きその一人最後はさすが健気なり。夫婦も泣く〳〵その首を太郎に持たせ御目見得。葵御前は若君抱き、

「初めての見参に平家に名高き侍を討取ったる高名、主従三世の奇縁ぞ」

と仰せを聞くより太郎はつっ立ち、

「サアこれからおれは侍。侍なればかゝ様の敵、実盛やらぬ」

と詰めかけたり。

「ホヽヽヽあっぱれ〳〵。さりながら四十に近き某が、稚き汝に討たれなば情と知れて手柄になるまい。若君ともろともに信濃の国諏訪へ立越え、成人して義兵を挙げよ。その時実盛討手を乞受け、故郷へ帰る錦の袖ひるがへして討死せん。まづそれまではさらば〳〵。いづれもさらば。家来ども乗りがへ引け」

と呼ばはれば、『はっ』と答べて月びたひ、栗毛の駒を引出だす。手綱おっ取り乗るうちに、いづくに隠れゐたりけん、矢橋の仁惣太踊り出で、

「ヤア先だって注進の褒美を無にしたそのかはり実盛が二心で駒王丸を北国へ下す段々直ぐに注進。詞つがふた争ふな」

といひ捨てゝ駈出す。実盛すかさず馬上より、用意の鎌縄打ちかくれば、首にかゝってきり〳〵〳〵。引寄せ引上げ引掴み、

「あっぱれおのれは日本一の、大欲無道の曲者め」

と鞍の前輸へ押付けて、首かき切って捨てゝげり。その後手塚ノ太郎、母がかたみの小合口、金刺取って腰にぼっ込み、綿繰馬にひらりと乗り、

「ヤア〳〵実盛。かゝ様殺して逃ぐるかいぬか。もうおれが名は手塚ノ太郎、コリャこの金刺の光盛なり。いなずとこゝで勝負々々」

と呼ばはったり、

「ヲヽ出かした〳〵。蛇は一寸にしてその気を得る。自然と備はる軍の広言、成人して母の怨、顔見覚えて恨みを晴らせ」

「イヤ〳〵もうし、孫めが大きうなるうちには、そこもと様は顔に皺、髪は白髪でその顔かはろ」

「ムヽ、ムヽ、ムヽヽヽハヽヽヽなるほど、その時こそ鬢髭を墨に染め若やいで勝負を遂げん。坂東声の首取らば池の溜りで洗ふて見よ。軍の場所は北国篠原、加賀の国にて見参々々」

「げにその時にこの若が、恩を思ふて討たすまい」

「生きながらへてをったらば、この親父めが御旗持」

「兵糧焚くはわたしが役」

「首切る役はこの手塚」

「ヲヽ、ヲヽ互ひに馬上でむんずと組み、両馬が間に落つるとも、老武者の悲しさは、軍にしつかれ、風にちゞめる古木の力もおれん。その時手塚」

「合点々々」

「ついに首をもかき落され、篠原の土となるとも名は北国の街に上げん。さらば」

「さらば」

と引別れ、帰るや駒の染手綱、隠れなかりし弓取りの名は末代に有明の、月もる家を後になし駒をはやめて立帰る。